玉都葉喜

208
12
705

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

玉津姿士喜

二編上

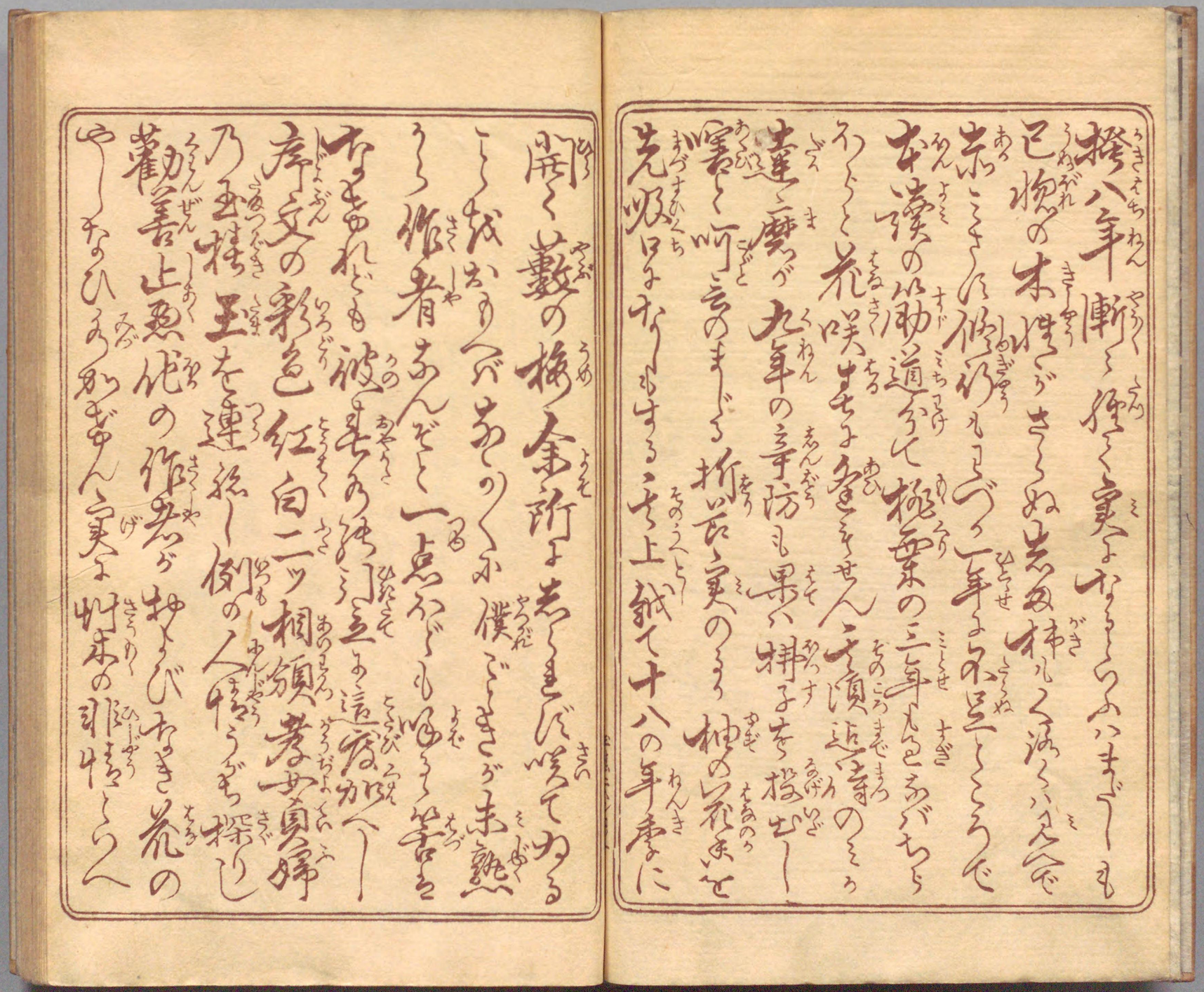
208
42
705

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

玉川堂主人二編の序

三才三本の秘傳ともいふべき戯作閑話
は続あるに意味深長にして如何
号の高名なる師匠の号と免されて易同為
名をもつて出る浪花人よ
笑尾神ゆ推して別号をば
笑訓亭と号す遠も狂訓家の養人で
しかはらく家業成顧問身下して



国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

ぐ〻も予師の業績そこ〻ぐまこゝろ
事も行ひ難く八才代の繁えを
はぎかも根ざも出来く亦駄えの一株

東都人情本一流の元祖
狂訓亭主人が松葉の門人
笑訓亭（キノクニバシ）

為永春友誌

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

孝女貞婦娜真都翳喜第二編一

江戸　鳥永春水作

第七回

さても稲荷の三階ゝ義楽のと深きゝ都親のお方が恩義を不便不男ひ妻ひ実不来りしるを若流れ若流れ頼ゝさて下より運びきたる汚食をも若流の席へ備へて娘の乃ゝ世変もいふ老のひぞいさへしけれ　父へトきゝお方や友どのく親れ遠とりふのハ此板みるゆゑ一向苦労へ仕るひのゝ個ゝへ知ら

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

どふ居さろしやるのろノ　万〳〵エ親ゆさんい左様でもござるませんが
爺ぎんい勘當しさ女さんざろ出ニもうゆいるひと言てお在ざ
さふでおざるわまた　又〳〵ハテナア世間の親達ハ男ひきりの祝
よとぞ仰れきれが家子のるを勝所くゝゝ見て居られる
ぶらうノウ　万〳〵エをまとりのふも実正のるでるひろう女さんい仰
様るゆいてもゆいるひとりふ　持でおざるわまたのサ　又〳〵ヤそうやう
不倫遠ざ自己の血孫でるひ者と親子の縁を結ぶとりふゝ
るろく一通りの因縁でいるひハサとる人親子でるひわもしろ他

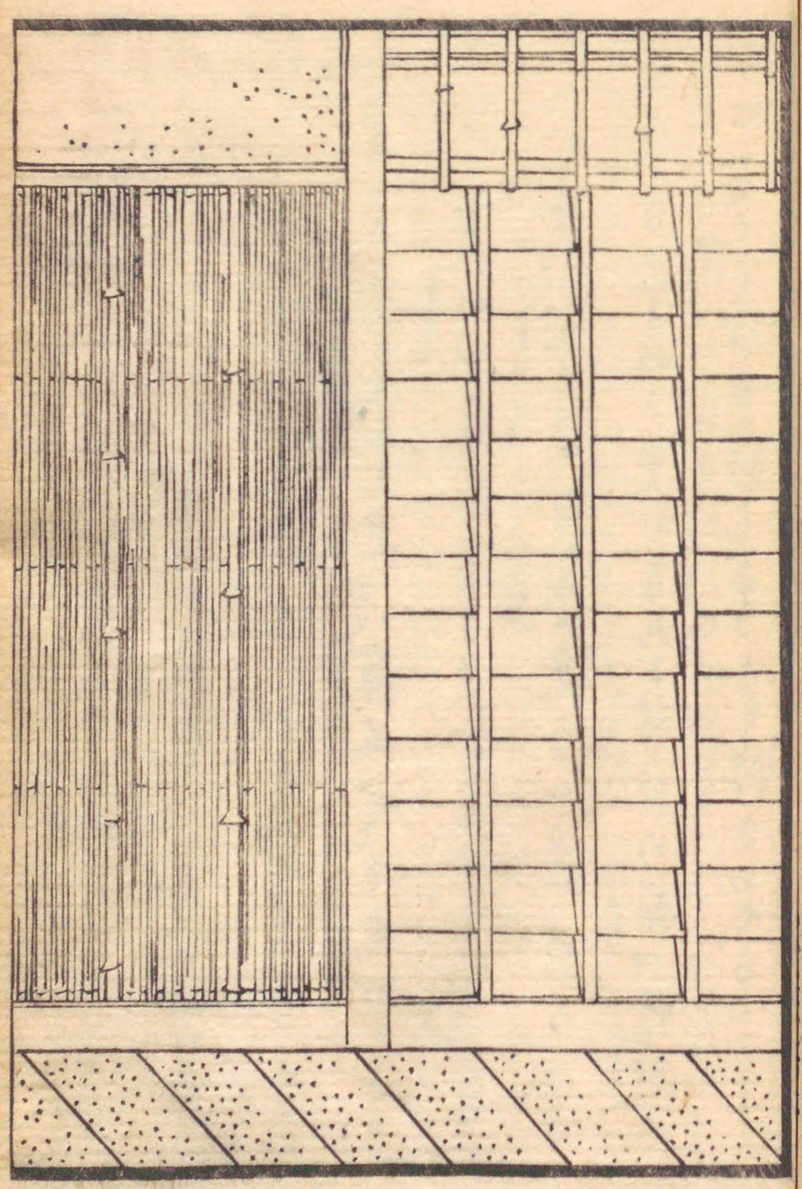
人の義を申しとしに変ざと思いるひ人間い悪業とふ申ざ
孫不連添女房ふい実子の息子ゆ爺親とりても入夫ゝ子男で
家の子を勘當とい義理も法もこれまん人るひこをもあるまひ
只家名が大切ざろ申ふをうふ發さ復立
でもあらふが女次帝の不時とりふい仰もひざく悔む程のを
ぢやアのるまひまを方を女房ふ仕度とゆふのが氣ふ入らぬとの
あとそれで家出致ませて源ふうト金ゝ二十両ぶりひざ一ヒ方ふひそうふ
さて申ふて　又〳〵ナ結久婦りが遅くるろうろ宮入るが申ふ

まさに直ぐに忍れて来るが為身がある事うナ娘ふ知ら世ぬ娘ふ
生所まで張まて来て推ぞふ仕方を拵出して貰やュレサ泣ぎ
ものア仕業のこなぎ仕二氣を丈夫して居やれナト口でハ娘ふ
力を付け因果その身も涙をうるうるみ変 父「エ」お方ヤ美
自身来ら是ずハ為を書て届て乎越がいく 万「アイ」爺ぎんも
余り案じて お呉るさいまいる 父「ふを案じ過ひ犯ぶあらふう
アア南無阿弥陀仏ト 小変ふ唱へ尽れ縁を幾度も同じ
言葉も老の癖 駕籠を出ふて帰る犯跡る娘ハ力なく

やう〳〵立て送り出いるを告るも 涙変 万「左様ヨウ」爺さん
気をつけて お帰んなさいヨを是ぢやア駕籠屋さん お頼み
やまして 〳〵ハイ〳〵ト 父「お方ヤあんまり苦労ふして
然うてハあらぬぞヨ 万「アイト 返るも 涙ふひせる娘の姿後
関父も駕籠の中ゑ涙を押へ堪へ 別れゆく跡ふお方ハ
ちか〳〵と二階へ上り 軒メ垂して若者達の方へ向ひ 万「左様
あらば誠ども内寛と 若「アイお送りやませうう子 万「ハイ為娘ハト
笑ひあうう下へおりる 下女「お帰りでおざるまして仇幸ふ 万「ハイ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用



左様なうト 稲荷屋の門口迄 廣小路の方へとさて彷
彷徨ら係ワアウト 數多の人ぎ 何ぞとうろ知らねども
お万ゲ歩むその面へ ドロ〳〵と逃散る人ぎみ あれいとおど
ろ見 足ゴ疲れ除んと〳〵 軒下より 多ねどひ 見を張り
る二人の曲もの お万ゲうろ〳〵 口を あきへてうどろ せば
一人い 茶より お万の懐中へ手をさ 巾着の紙を
ひろ〳〵 そ引 いぢを お万い 中〳〵 まぐり付き 変を 出んと
ゆげども 大男ゲ二人 そ ろ〳〵 を とる 勢ひ 力を 出だ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

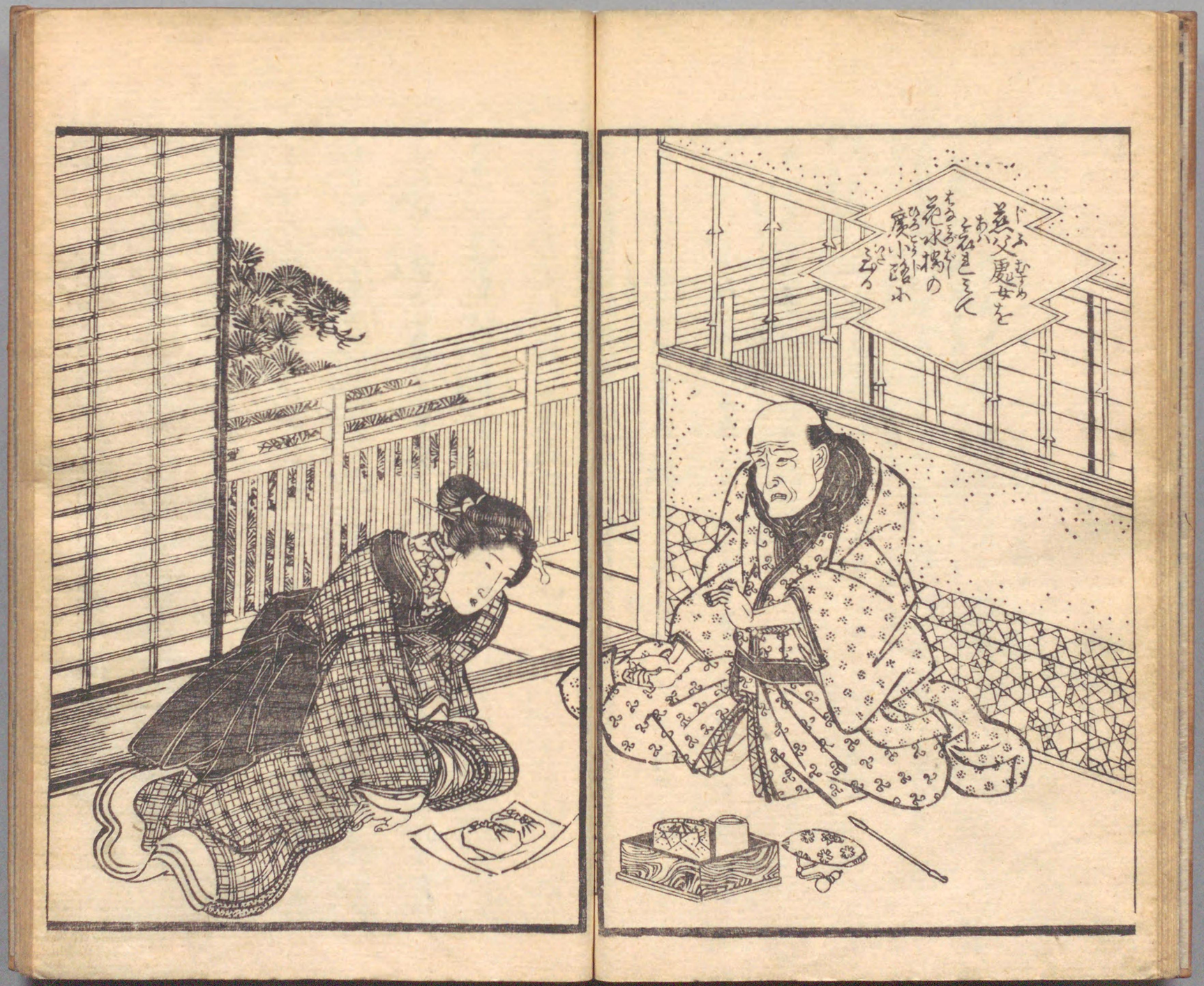
ガラス使用

かよはき娘のちらつゆおよばぬのこう崩きこうあるこの
人ゆ踊られこちまち金成うぞいきそたぞめそものへいろる
きどさや二人ともの西人の辞集ゆ修きゆびこうけりお方へ
和ものきこれつ泣ぎゆそ万へ盗人くト欠出ーても
甲斐文ぞ多元公のうちのうのーさへおもひやきて表れこう
そもいろうれば孝うそきこ安きえうへーき身のうくぞう
落命るあとのこりやされど孝貞の娘へ弁伴の
助けあり一ぞ関窮ーこうも終をめぞうくさうへ

ぎうんや巻をひらくの娘ゆこち他のうえぞと見捨のぞど
ようくようみこけこうあうーこうこけこうで自彼その
身の痕とるこあらんそれへさそ彼お方へうくく
我家へ立久きど親の子元をたうて時合力されこる
金をあ川てきぐゆ裏屋の仮住居友次郎きー向
長家の老女を力こそ代るどさこうぞ只一人案じぼう
きそ淋ーさもこきれ果こる家の内をきこ見きへにゆ
付け徇ぐるーくホット吐息をつく西人常ゆたのみー

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用



国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

老女の夢　老「お万さんく婦んなさるとすぐ
孫をの膝子をあけて　老「エお万さんと耳ホロ行っ者ぐらく
呼きけれバお万ハまた所へ這倒れ　万「おばさんどふしてこら
ようろふれんそをぢやアモウどふしても　老「左様サアお屋
あきの方でもモウ突出して仕まるとサそれぞろ左様され
るハ中金をさとしもおしらんてやりてハものゝ他のあ
らアどふでもいゝが友さんの様なきしゝらぐでどふして
のけるものゝかいそふなことゝ以バお万ハいとゞせうゝ

万「サアその金もおとろさんがあるゝどおんなざろうそをを
今ゝもおゝしきんよりて友さんをゞ堪忍して貰ろうとうれ
しく思ひて帰る道筋ゝ行ゝの大きゝ死の人おみを先
ゝ人よりて除よとする時盗人ゝ二人で私をひどゝ目ホ
合しゝもりて性ようゝ示と言てハ金の出来ようゝ尚も
ゝ一ぢふしゝろゝようゝらハ中ゝ途方ホ人ゝ一娘の風情
氣の毒そふなかの老女ハ　老「ナニエ先刻おろさんゝ金を
お貰ひのをゝろうまるまゝ川ゝエそして何程ぞうゝゞエ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

百包んど俵ごろうぞへ住まひが二十あまるとかろ
ぞんが言ひ〳〵ショト泣て居る老人二十あヤレ〳〵ヲヲそ
ヲヤヲヲ大変なおらざれ人仏の国ハ動物〳〵なるあの
所へ二十あのゑんのとハ大金を内密でこまるとハ親が
あらくハ者人もマア沢山そハヲ見てショと川へ流すもの
ウ子寛ハうハ一分で差無のもぐりのその金を貰ふと
きぐハらまて来ろとハいまも世ひ悔しとをしゐ
まろこのう百おろぞんへのハ〳〵けようお金がうければ

友さんの云矣の罪を救ふとぶるうるひわ老人兎てあ
を変ハ仕程を爺ぞんの方へ左板ハろて寄う一度金を出
あそお貰ひるまさうハ左板もハられまひうち百ハ二ヲれハ左
板しと貰ハまもちろぞらハけまど近の処ぢやアるー夜が
更るうう使を頼んでも今ッうぢやアろハ合まハと思ハ
ハ老人左板サ今歌の中ハ泣ろうハ出来まハー亦あの
ゲ自分泣ても変ハ爺ぞんハ逢まハせど何板しとも友さん
の結命ごのハ百ヲ引物がいくるうりて来ろハ嬉さん

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

その火鉢の引出しゝ丸美がある引出しゝお呉る　老「アイ
中の引出しゝ　万「アヽ左様ジョ　老「ヨヤそれうあ
此間横山町の日野屋でお買の手まれ帯とゞあるでい
るひ久疲薬帯を姫尾の痛む処へ当てお結びる　万「ハ左様
だつけそれも下の引出しゝある　老「アイサア
ヨヽ深入雑薫りがする袋　万「アヽ袋の代りもする
ゞ子ひ玉の所を疲の痛ひ処でも何でも痛む所へ当て結ぐ
居ると何時ともなく痛ひのをまれて結ふヨそれゞ

万病ゝまれ帯といふのをこのゞとサ　老「左様久ける事の
手めやのおゝくさんが此殿へあゞりそお在の浪れのゞとゝ久
買てお上ゞとりけて私ゝお見せるまゝゝけそれまゝ浪の
天鵞絨の帯が対て居まゝけ　万「アヽ真田もあれゞ
天鵞絨もあるとサ今ゞやアれ殿方で付まれ帯成
お買ひるまゝる方いるひとサアイタヽヽヽ
○此手れ帯といふ横山町二丁目日野屋三右衛門方製
製ゝ出居る美ゝそ当今女中方の秘蔵流行の

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

帯ゐ表あくふちるして猶左き国くふ妙茅を初ゞ一
ひちへ則ち粧剖亭の玄波婆ひう
動てお万へ終夜あんゞつゞけ一憂るゆも猶のいてこゝも寄て
らくへ茶の表特ふてまれ帯まやく眠るを風引せゞと
他人ゑゞらも信切よ知をつけらへ新婦の実情とを思へる色
そもくかゝる憂苦労も絶えて浮世ふ見紀とゆゞ看官
好色の限ふのゞ眼を付ゞしてゆゆく表まを知ることあらべ
作者のお意をうんと云。

第八回

山よりも高く海よりも深き親の恵楽ひ沿頭で別れ山の
麓へ帰りて後もお万ゞ父へ只一向ふ娘のゆ案ゞ々るしく
物をいてゆ何ゆもまに付ねどそれぞとゆゆね支婦中あゆね
知よ使せも せぞゞ人よく寝ろふ入けるゞ眠れゞあ一き茅を
結び覚まべ角 乗ゆる娘の彩糸いゞ せん何と安
旅の身限もと思案ようゆ一眠つゞゞまこゆや苦労の
義を乃くあせり苦しむうゆ変うゆ流れるのを咬対て

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

側ハ寂〻〻女房ゞさも邪見なる声せゑ〻〻たゝ
女「エヽシ〻〻コレサモシヤイ」ふけ人きる折角寝入ノ込んゞのハ
猫を沈ちハ子モシ〻〻又〻ヲイ〻〻文〻目を覚し給へ
馬鹿〻〻しい何程仕ようとのゞれ人けしからぬ人ト邪ケン
女房ハ母起されて〻〻ハ目へ覚れども寝ぼけの猫ぎの
体ちゝ猫息吐く家も資産乃らる園鬼丈義と
おゝ人ど狂更ハ霄のあとき人男ひ出し家与へる金ハ
途中ぞ狼の身の上ハ差や凶るでもあらハせ知る左案ど左れば

覚束なく夜の明るを待て〻〻猫をいるあり〻猫
息つく猶ひとも知れ不実の女房ハ平氣で眠る高

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

劍き河よ異しひろ中庭の兩戸の明る音きらくと突へ
けきべひそろふ是我何つよ青き火の焰パツトキー入りて
四隅を照しさも おそろしき鬼の如くなるもの 椽側ふ立
現れし 姿をあげんとするふ 姿も出ぜ 身も あびれて 知り
き ねべ 只うづく きりて ひく 拙名 親金 ここく 居る 兩ふ 兩戸 ゼ
五 押明しうべ 何 変ぞと 鬼を あらしく ひそふ 視れば 狂
おそろしき 牛 及 一 頭の 鬼 庭の 中ふ立 真中 ふ 火 焔
黒 煙りと ともふ 炎々と 燃上りる 火の 車 ゼ 引 ぶ 側 ふ く

きき 来べ 何 と 多 ぜ べ 死 や と ろ 人 ゼ 居 る 傳 の 女 房 ハ ぐ ゼ ら
ハット 返 る も 寢 巻 起 上 り つ 躍 る 椽 ぐ へ ハ ら ゼ
平 伏 き れ べ 何 変 ろ 青 鬼 が 鉄 の 棒 ゼ 突 き ら ゼ 女
房 ふ 叫 し く 言 渡 し 結 と い ふ 早 く 火 の 車 の 上 ふ 逃
登 せ と 告 し く 多 ち ふ ぐ ら く く と 雷 の 鳴 る ま ら く ふ
雷 紀 こ と ろ ゼ 虚 空 ま る ふ 東 き 雲 ゼ 雷 も 多 ら ね そ の
あ り き 四 方 ゼ 空 も き ご 暴 ら 稲 ド ロ く と 雷 の 青 ハ 走 ぎ
ら れ ど も 国 え し ハ 美 ら 現 ゼ 見 ら 人 ら ね く 澄 く 居 ら

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

這出て怖く驚ら桜側ふいろ七度を見下せば例れ伏
う女房の生死いきれぎありけるを再度驚き立騒ぎ
家内の者を呼覚し医者を招き氣附を与へ煩く
外絶しけるが暫し息を吹返し年時ぐりする頃より
自然と髪を振乱し男をもどへく苦しげふ女引あの
ヲあり〳〵と〳〵あく〳〵と叫び狂へば傍の他人の眼ふたせ
見へねども お方の父が生ぐろふ見すし地獄の火の車ふ
の手迎ら来とうける苦しみ狂へ氣まげし〳〵恐怖りの立

如く手ものも火の側へ寄添ひ熱け見ば元人おそれ
て薬もあるへど終ふ其日の午の刻狂ひ死をぞ〳〵うける
○まのあのぐろふ似うる怪異へ辰巳の窓ふも赤〳〵赤
古くへ狼八丈のも説えれど絶へく世ふ死虚渡ふあだ
世間ふ多くある狂見の悪強欲邪乃うて情も表
さも知らぬその天罰ぞ生ぐろう地獄へ落ぐ〳〵
終う絶ふ〳〵るもの教えあり狂り身へ言消さぞ
おそるべき人を教訓の一助とす〳〵

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

きそもお方へ手紙日友達の暮れ有りしを彩み相談して
衣類家財まで残賣拂の潮く四五日過ぎの金子残
の調へまづ有れを以て日延を願ひ内々ふて漸く
ふ義悲を尤く〳〵只一日の間を免され勢て再度の調べふ
不足の金壱十五両とあれば残金十一両四朱程足りまでふ
いろいろ手段も不足ふく〳〵ざさべ全くやうく〳〵ざさべを渡さ
るも格別の義悲ありと伝ふ頼み入る人の挨拶へ手
日の申ノ刻頃うて友次郎の友達もまづ習ひの乱体で

お方の姿をあぐさもんと帰り路ふ小料理屋ふ休ふ酒有
あどうして鬱気を晴させいさされども お方へ伝よ友次郎が
全く身の明らぶ立〳〵とふるもあらざれば明日の支のこと気ふ
かりて兎ふ角鬱情酒の席ふ夕餉ふ及ぶ〳〵料理
屋を出く友達へそれ〳〵ふ別れ切お方へ家ふ立帰れど家内
もかくふて母のこ安ふる所ふ居られもせず又秋の中ふ独りの
金を調へざれがるくね方ふ縋も居ても詮ふ入れと思案
をしても見ても父より外ふ大金の借る次第の詮方もなくと伝を

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

実ら岩よう淋しく告ぐる暮六ツの鐘を吹ぐう気をたげ
まして他人をも頼まぢ、山のゆさしたを失出せーゞ さをぶはををき
夜の屋敷く見も石も町並ゐて武家縁ハ門のかゆ人
出入の形勢みけまぢおのづから 佐兵もおかなく 教ムらく 桃燈
えを稀ゆれば 形後月ゐられて氣味ゐるく 身を猶ゆ 猫の
風情 他見ゆ見ても 故あり と思へば あるどる 破落戸的が
側をく 歩ゆつ 「姉さん 途中ゲ 淋しくゐゆ 情人の宅を
送ゆ 歩ゆゝ ノトいゆ とて 物をドキ せーゞ 気絶 強く

ヲバイ ゐゞゆ おざゆ まゆゲ 坂ゆ 生ゆて おざゆ まゆゲ 早ゆゆ
約をゆ ゆ ゐ ゐ ゐ 「アゝゝゝ 花魁の廣出路ゐ
山のゆの 方へゆくのゲ ナニ 近所ゆ ゆの 先程 演下町ゲ 成
刎をゐ ゐ ゐ ゐ ゐ 美ノ刎 ゲ ゐ ゐ ゐ 方へ 約と
約ゲ ゐ ゐ ゲ ヲ イ ナニ ゆゲ ゐ 通る 路ゲ ゐ 私 ゆ ア
紙 刎 て 居 ゆ ヨ 「ユウ ゐ 仕方ゲ 信切ゆ 教て 来る
ノゲ ゐ 悪く 家 俺 を 言ゆ ゐ ん ゆ 仕 実 嘗 ゐ ゆ 彩 く お 屋
変ゲ 出 来 て 練 嬢 ゆ ゐ ゲ て 佐 兵 ハ ゐ ハ ナ それ も 路 で

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

ひなをとり度い二丁ゝ三丁位てきる故人くゝるサトあ中ハ
ちや夷人別の梅子木 誌方ハ鶯き空も墨うて白兩の
藤ハバラ〳〵降出しけれバお万いいよ〳〵公関章て一さんハ
矢出せバ彼悪漢も同じく〳〵矢出し兩ハ仕来ちりぐハ
ゐる筋付込みお万を捕へ「コレサ〳〵マア」代門の下へ遠入て
兩の晴るのを待る其人ハ所ハ屋敷どろう破れかゝ川て
居るが来ろうひゞく降てくるを代門番所へまゐて度ぐ
ろうゝいサ〳〵ト引ぎり込れてお万ハ悲〳〵思へども兩も

強けれバ去ぢろく横藤内ハ彼悪漢ハ兼ての西存流ハ
今ぞとお万のあ世ろうちやれうゐる而紫ハおよぶせ根を
さろひて逃んとすれどもろうろう押へ動くせぬはるハ手拭を
押ゆ〳〵れ悔しさ会さ涙を流る支さ人かゐいわべ
眼ハ涙のこうゆつて退れぬ仕義とゐうける処へ兩ハ固
つゝ二三人一人ハ弓張の挑灯を神て霧ひ入ハ
紙ハ〳〵ある〳〵代更ちあんねん・〳〵ちゝ〳〵今ハ上ぎ
ろ〳〵ト引〳〵〳〵白兩ゞトゆつてぢろく門の下へ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

208
12
705

欠込けるべ悪漢もさすがビックリ目を放せば女房は
慌〳〵く立上るさぐるに人〳〵兵見合せあまたへとおどろく
その者の手風情そも此後いかるる変ぞ次の巻にぞよろしくなへ
り〳〵。

玉津だ森第二編巻之一了

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

208
12
705

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用